

## 障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の開発

—障害を学ぶための授業の比較から—

田中恵美子<sup>†1</sup> 平井佑典<sup>†2</sup> 野澤純子<sup>†1</sup> 奥平真砂子<sup>†4</sup> 下尾直子<sup>†5</sup>

(令和 2 年 1 2 月 1 日査読受理日)

### The Development of the Lesson for Awareness and Promotion of the Understanding of the Social Model of Disability -Comparison among the Lessons for Learning the Disabilities

(Accepted for publication, December 1, 2020)

#### 要約

障害の社会モデルは国連の障害者権利条約に採用された障害の捉え方で、日本は 2014 年に批准したが未だ浸透していない。大学教育において世界標準の捉え方を学ぶことは、今後の共生社会の実現に寄与する。本研究では、障害の社会モデルの啓発・理解促進を目的とし、大学生を対象に授業の開発を行った。従来の障害を学ぶ授業（障害知識先行型授業、障害疑似体験授業・介護等体験、障害者による講演）を批判的に検討し、障害の社会モデルをベースとした障害平等研修の発見型学習と障害当事者がファシリテーターを務めるスタイルを踏襲しつつ、機能障害について、特に大学生に多い発達障害を中心に取り入れ、より短時間に設定した。従来の障害を学ぶ授業も障害の社会モデルを基礎にすれば社会変革を促し、共生社会の構築に寄与しうることが示唆された。

#### Abstract

The social model of disability is based on the perception of disability adopted in the United Nations Convention on the Rights of Persons with Disabilities. Japan ratified it in 2014, but it has not yet penetrated deep in society. Learning how to perceive the international standards of disabilities by university education will contribute to the realization of an inclusive society in the future. In this study, we developed a lesson for university students to raise their awareness and promote understanding of the social model of disability. We critically examined the lesson of disability knowledge, the lesson of simulated disability experience / experience of care, the lecture by persons with disabilities and developed a new lesson that relied on Disability Equality Training based on a social model of disability by incorporating facilitated participatory learning and hiring facilitators with disabilities. We also tried to include information about the impairment of developmental disabilities which number high among university students and we made lessons in accordance with class time set by the university. Based on the social model of disability, traditional lessons of disability will be adjusted for social change and contribute to create an inclusive society.

キーワード：障害の社会モデル、障害当事者、発見型学習

Key words: social model of disability, people with disabilities, facilitated participatory learning(FPL)

## 1. はじめに

障害の社会モデルとは、1970 年代以降英米において理論化された障害を説明するモデルであり、2006 年に国際連合において成立した障害者権利条約に採用された障害の捉え方である。障害者権利条約は 2020（令和 2）年現在、180 を超える国と地域によって批准され<sup>1</sup>、日本も数年間にわたる様々な法改正の後、2014（平成 26）年に批准した。

しかし、条約の批准から 6 年が経過しているにもかかわらず、その浸透度は低く、日本の中で周知が進んでいるとはいえない<sup>2</sup>。加えて条約の批准に先駆けて 2013 年に制定された障害者差別解消法は、障害者に対するあらゆる差

別の禁止や合理的配慮の不提供を差別ととらえる視点などを含んでおり、法の趣旨を理解するためには障害の社会モデルについて見識を深めておくことが必要である。

障害の社会モデルを理解することは、今後の日本社会における障害理解・心のバリアフリーの増進、共生社会の構築に寄与することになるだろう。本研究では、この比較的新しい障害の捉え方を体験的に理解するための授業の開発について、従来の障害を理解するための方法と比較し、その意義を考察した。なおここでの授業とは、大学教育における 1 科目のうちの 1 コマ（90 分～100 分）を想定している。

## 2. 障害の社会モデル

考察を進めるうえで、あらかじめ障害の社会モデルについて概略を説明しておく。ただし、障害の社会モデルについては多くの専門書が出版されている。その中には批判的な議論もあり、昨今は障害の人権モデルという新しい展開

<sup>†1</sup> 東京家政大学 人文学部 教育福祉学科

<sup>†2</sup> オフィス平井

<sup>†3</sup> 東京家政大学 子ども学部 子ども支援学科

<sup>†4</sup> 公益財団法人笹川平和財団 総務部特任調査役

<sup>†5</sup> 洗足こども短期大学 幼児教育保育科

も見られる<sup>3</sup>が、本稿では紙面の関係上必要な範囲の代表的な論者の説に止める。

障害の社会モデルを一般化させたのは、マイケル・オリバー(Michael Oliver)である(Brindle, 2019)。彼は、「隔離に反対する身体障害者連盟(UPIAS: the Union of the Physically Impaired Against Segregation)」が1975年に発表した障害の基本原則を引用しつつ、自らの理論を展開し、「個人はその人の機能障害よりも社会やその人を取り巻く環境によって無力化(障害化)される」と述べ、障害が社会や環境によって作り出されることを明確に示した(Oliver, 1983)。

オリバーに先行して、障害の社会モデルに基づく障害観を自らの活動の視点としていたのは、ヴィクター・フィンケルシュタイン(Victor Finkelstein)であった(Oliver, 2011)。彼は、UPIASのメンバーであり、障害の基本原則を構想した重要人物でもあった。基本原則は、障害者が直面している問題は、彼らの機能障害によるものではなく、彼らのニーズを考慮しない社会の失敗によるものであるとした。すなわち、インペアメントという個人の(精神を含む)身体的機能障害を対象とし、それを有する人の生活に介入を行うのが障害の医学モデル(個人モデル)であり、これによれば、障害は、それを有する個人の悲劇であり、(リ)ハビリテーションを含む医学的な介入によってその改善を目指す。一方、障害の社会モデルは、障害はその存在を考慮しないで作り出された社会や環境によってもたらされるもの(ディスアビリティ)であり、したがって、その解決には社会や環境が変わっていく必要があると位置づけた。

さて、このようないわゆるイギリス社会モデルに対し、アメリカ社会モデルという捉え方がある。中心的な論者はアーヴィング・ゾラ(Irving Kenneth Zola)という医療社会学者である。彼自身もオリバーやフィンケルシュタイン同様に身体障害を有していた。オリバーとフィンケルシュタインはそれぞれイギリス障害学の父と呼ばれ(Berghs et al., 2019, Pring, 2019)、ゾラはアメリカ障害学の父と呼ばれている(Mairs, 2004)。

障害学の研究者である杉野昭博によれば、ゾラの社会モデルの特徴は「障害の普遍化モデル」(杉野, 2007:103)であるという。すなわち、現代の健康至上主義社会においては、障害者や慢性病者は社会から排除される。しかし、身体的特徴として障害がない人でも、やがては老いる存在であり、その点において障害者と共通のアイデンティティを有することができ、共闘できると考えた。すなわち、ゾラは障害を「自分の問題」として語る「誰もが病人の社会」(杉野, 2007:78)について考えたのである(Zola, 1982)。

杉野はイギリスとアメリカで異なって語られている社会モデルを、「障害(者)を排除する社会構造と社会意識に配慮しつつも政治経済的分析を行う」イギリスモデルと「政治経済的要因にも配慮しつつ障害(者)を排除する社会意

識を研究する」アメリカモデルと分析したが(杉野, 2007:148)、「社会モデル」としてどちらにも共通している点は障害者に対する抑圧を社会とのかかわりの中で取り上げている点であり、障害の概念は社会とのかかわりの中で変化していくということである。これは障害者権利条約の中でも示されている<sup>4</sup>。国連障害者権利委員会のメンバーである石川准は障害の社会モデルをわかりやすく図1のように示した。



図1 障害の社会モデルの説明<sup>5</sup>

すなわち、障害(社会的障害)とは、機能障害と社会的障壁との掛け算によって生まれる。障害の医学モデルでは機能障害をできる限り0に近づけることが目指されてきたが、障害の社会モデルでは社会的障壁を0にすること、それを通して(社会的)障害であるディスアビリティを0にすることを目指す(田中・奥平・下尾・野澤・平井 2020:4)。

### 3. 障害を学ぶための授業

障害の社会モデルの啓発・理解促進にむけた授業(以下「社会モデル授業」とする)では、障害が身体的特徴を通して社会や環境によって作りだされるものであること、また社会との関係の中で変化していくものであることを理解できることが必要になってくる。ここでは、従来の障害を学ぶための授業における課題のポイントを論じる。

#### 3.1 障害知識先行型授業

中村義行は長年特別支援学校教員免許に関わる授業に携わっており、教育学の立場から障害理解について論じている。それによれば、養護学校免許取得関連科目等従来の大学教育においては、「障害の特性についての知識が説明され、支援等のかかわり方を学ぶことが多く、学生にとっては自分達とは異なる特別な存在として『障害』が理解されてしまうことが多かった。現在の特別支援学校免許取得関連科目でも同様の傾向がみられる」と自戒も込めて批判している(中村, 2011:1)。中村は、知識が増えるだけの授業、知識をそのまま人に当てはめてしまうような理解を否定し、「『こうあってほしい』『こう変わってほしい』という自己の枠組みを最初にもたないようにすること」(中村, 2011:1)が重要であると述べている。そのためには、かかわりを通

して実践的に「障害」を理解していくことであるという。

また、かかわりがあったとしても、第三者的理解（これを中村は「知見」としている）を進めていくと、「目の前の人が『障害』に関する『知見による理解』という枠組みからしか見えなくなる危険性がある」（中村, 2011:3）という。この場合、「かかわられる側にとっては、『障害』という『枠組み』からしか見られないことのしんどさを感じることもある」（中村, 2011:3）。「目の前のその人の全体像に視点をあてた『理解』、そして他者とのかかわりを通して「自己理解」へつながる理解、すなわち目の前に起きている障害にまつわる現象を自分事として理解できるようになることが真の「障害理解」へとつながる（中村, 2011:3）という。

中村の論から障害に関連した学びの一類型の特徴として、機能障害の理解を目的とし、その説明を通して障害は障害のある「彼ら」、すなわち自分とは異なる第三者の課題としての理解を促してきたものがあることがわかる。これを仮に障害知識先行型授業としておく。

### 3.2 障害疑似体験授業・介護等体験

小学校や中学校でよく行われている授業として、目隠しをして歩いたり、車椅子に実際に乗って段差を経験する授業がある。これを障害疑似体験授業という。また、教員養成課程において介護施設等で高齢者や障害者に対する介護を体験する介護等体験がある。

これらは、体験的なかかわりの中で「障害」を理解する。しかし、前述の「知見による理解」を促すようなかかわりを通して障害の医学モデルをベースとした理解を誘発しやすい。障害疑似体験授業では、機能障害の違いを経験する。目が見えないとはどういう経験なのか、歩けないために車いすを使って町を歩くとどういことが起こるのかを学ぶ。これは、障害者は何ができないのかを確認する作業ともいえよう。この種の授業の感想の多くは、目をつぶったまま歩くことが「怖かった」、車椅子に乗ってみると思ったように動けず「大変だった」、「自分は障害がなくてよかった」などと感じさせ障害観をゆがめる可能性もある（田口・林・橋本・池田・大伴・菅野・小林・三浦・戸村・村松, 2012:304）。

介護等体験は、そのような「不自由な」障害者や高齢者に出会い、すべき支援を比較的短期間の間に、非障害者である施設職員等支援者から学ぶものとなり、非障害者＝支援者、障害者＝被支援者という非対称な関係を一面的にとらえる傾向がある。

しかしながら、これらの経験は、まさに“疑似”体験であって、本当の障害者の体験ではない。例えば先述の石川は、弱視から全盲となったとき、普通学校の中学2年生から盲学校の中学1年生へと転校し、このことを「マイナスからの出発」と捉えた。「見えない」に加え、学年を1つ下がることはゼロよりも低い「マイナス」を意味したのだという。

ところが盲学校に行ってみると、「全盲の生徒たちは、

非常に元気で、点字を猛烈なスピードで読んだり書いたりしているし、学校では杖とか使わずに走ったり、先輩たちも雄弁で理路整然と様々な主張を展開していた。『『見えな』ではない』ではないということを強く理解」したという（石川, 2018）。

石川のような後天的な障害の場合は、できていたことができなくなるという喪失体験によって障害の不自由さを非常に意識する場合があるが、先天性障害の場合、生まれたときから機能障害のある状態のため、後天性障害者が感じる不便さも経験しない場合がある。また後天的障害であったとしても、目が見えなくて「怖い」という思いや車いすに乗って「大変」という経験は、障害の社会モデルの考え方からすると、本人の機能障害が理由になるのではなく、その身体状況に際して必要な支援や環境が整っていない社会の方に課題があると考ええる。石川の例で言えば、学校の環境が整っていれば、盲の生徒が走っても大丈夫なのである。

このように機能障害における経験はその蓄積や環境と共に変化するにもかかわらず、疑似体験や介護等体験による一時的・限定的経験により、障害者は非障害者から一方的に“大変な経験をしている人”として表現されることになるのは、障害者にとっては違和感のあることである。ましてやその不自由な経験の原因は社会の側にあるとすれば、この授業・体験では原因を個人の身体状況に矮小化していることになる。

### 3.3 障害者による講演

様々な領域で活躍したり、成功を収めた障害当事者が自らの体験を講演するというスタイルの授業もある。この場合には、障害当事者が主体的な存在として登場するが、話の内容や運びによっては、個人的努力による困難の克服という、障害の医学モデルを強調する話に終始してしまうこともある。

また、参加者、主に非障害者はその話を聞いて「元気をもらった」と感想を述べるが、その際“（私よりも大変な状況にある）障害者がこんなに頑張っているんだから、私も頑張らなくては”と「参加者が自分自身のいろいろな課題を乗り越えていく動機付けを得るということを目的」とする場合がある（久野, 2018:35-36）。

このような障害の捉え方は、昨今課題とされている「感動ポルノ」と通ずるものがある。感動ポルノという言葉は、オーストラリアの人権活動家であるステラ・ヤング（Stella Young）がオーストラリア放送協会のウェブマガジンで初めて用いた言葉である（Young, 2012）。ヤングはその後 TED というトーク番組で、高校教師として教壇に立った時の経験として、生徒から「いつもの感動させる話をしてくれ」といわれた例を挙げ、多くの人が障害者を「感動を与えるための存在」としてみていると述べている<sup>6</sup>。そのようにして非障害者は、自分の経験を、障害者よりはましだととら



え、消費する。ヤングは動画の最後に障害の社会モデルの考え方を推奨し、こう述べている。

「私が住みたい世界は、我々障害者が真の成果で評価される世界 私が住みたい世界はメルボルンの高校2年生が新しく来た教師が車椅子に乗っていても微塵も動じない世界です。」

### 3.4 障害平等研修(DET: Disability Equality Training)

障害平等研修(以下 DET)は、1995年にイギリスで障害者差別禁止法が施行された際、その推進のための研修として編み出されたものである(久野, 2018)。そのため、先述のイギリス社会モデルを基礎としており、機能障害という身体的特徴に着目するのではなく、それを通して社会の中で生み出されている差別や不平等、社会的排除を障害として理解し、そのような社会を変えるための行動を形成することを目的としている。しかし、それは単に「障害者に手を貸すということでもなく(もちろんそれも大事ですが)、それまでの自分自身の価値観や考え方自体を批判的に見なおし、自分自身の行動そのものを変え、更に社会を変えていく行動を作り上げていくことを目指し」(久野, 2018:25)ている。

そのため、発見型学習<sup>7</sup>という方法を採用している。参加者は、「他から強要されず、自らが理解しどういう行動をとるべきか考える教育的なプロセス」(久野, 2018:25-26)を経験する。具体的には様々なワークにグループで取り組み、それらのワークを「積み重ね」(久野, 2018:28)て経験しながら徐々に視点を獲得していく。この方法は「差別や権利を課題とする人種・民族差別や、ジェンダー、LGBT等の性的多様性に関する研修、在日外国人、同和問題に関する研修とより類似性」がある(久野, 2018:33)。

また DET では、ワークを実施していくに際して障害当事者がファシリテーターを務める点を重視している。従来の障害を学ぶ方法では、医療や福祉の専門家が講師になることが多かった。しかし、DET では「障害を差別や偏見、不平等として直接経験した人」である障害当事者が、「参加者の学びを支援する」進行役として、社会参加している姿をみせることで、障害者に期待されてきた被支援者の役割を覆す効果が期待されている(久野, 2018:32)。

ただし、DET ではファシリテーターは自らの経験に基づいた話はしない。「参加者の発見を促し、参加者が社会変革の行動者となることを効果的に促す役割を担っているため、自らの経験を話すことが前述の感動ポルノに通ずるような「乗り越えた体験」や「動機づけの講演」、さらに機能障害を強調する「医学的情報の説明」になってしまうことを危惧しているからである。障害平等研修はあくまでも「参加者が障害の解決に向けた行動の主体になることを目的とする研修であり、参加者一人ひとりの悩みを解決することが目的ではありません」(久野, 2018:34-37)。

また研修は「少なくとも3時間は必要」であり、2日か

けて実施する場合もあるなど、比較的長時間となる。むしろ大学等の講義のために内容を省くこともあり得るが、それは望ましいものではない(久野, 2018:38)。

## 4. 障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の構築

これまでの議論を基に「社会モデル授業」の開発を試みた。「社会モデル授業」の目的、参加者、全体の流れ、内容と特徴を説明する。

### 4.1 目的

「社会モデル授業」の目的は、障害の社会モデルについて理解を深めることである。すなわち、障害が個人の身体の問題ではなく、社会のあり方によって変化するものであることを理解するとともに、その社会の一員として各自ができることを考察することとする。

### 4.2 参加者

参加者は科目担当教員とファシリテーター、受講生となる。科目担当教員は、1科目14,5コマのうちの1回を「社会モデル授業」にあてる。ファシリテーターはその1回を担当するゲストスピーカーとして参加し、その回のファシリテートを担う。

### 4.3 全体の流れと内容

科目担当教員によるファシリテーターの紹介、授業の狙いや流れについての簡単な説明の後、ファシリテーターは自己紹介として、自らの機能障害の簡単な説明と日常生活の様子として自宅での様子や自らが関わる活動、仕事の様子などを示す。

次に動画を視聴する。動画は主人公の大学生が講義を受けているところからスタートする。「障害について考えてくる」という宿題をもらい、アルバイトに行くと、着ぐるみを着て子どもに人気のキャラクターに扮装することになる。



図2 着ぐるみを着た主人公

着ぐるみを着たま公園の中を移動し、野外ステージに立つのだが、その間に公園内の段差やでこぼこ道、子どもたちとのかかわりの中で様々な経験をする。受講生は視聴しながらワークシートに主人公の「困りごと」を書き出す。

一端動画を止め、受講生は各自で、続いてグループで着ぐるみを着た主人公の困りごとを確認する。

続いて動画の後半を視聴する。発達障害当事者と車いすユーザーが登場し、主人公が経験した様々な出来事を解説していく。解説の内容は機能障害とそれに対する環境や周りの人々の対応であり、その時の気持ちを主人公に問いかけながら進める。そのやりとりを通して、主人公は（受講生も）障害が自分の身体にではなく、環境や人々のまなざし、受け答えの中にあったことを見いだしていく。



図 3 障害当事者による解説

動画は最後に再び教室の場面になり、主人公は公園での経験に基づいて、障害が環境にあることを語る。それに対して教員が障害の社会モデルについて解説を行う。最後に「今後、どのような社会であつたらいいのか」という教員の呼びかけに、主人公は問題の解決を個人の変容に求めるのではなく、環境や社会に変化を求めていくことが必要だと気付く。

動画終了後、ファシリテーターは障害の社会モデルについて再度解説し、障害の社会モデルに即して自らの経験を語る。

その後①「困りごと」について医学モデルによる解決と社会モデルによる解決を各自考案し、記入する。その後グループで話し合う。または②新たにワークシートに自分の困りごとの経験を記載し、それについて医学モデルによる解決と社会モデルによる解決を考えてみる。

最後に、ワークの振り返りを行い、ファシリテーターは「これからどんな社会を目指すのか」「そのためにあなたにできることは何か？」を問い、役割を終了する。科目担当教員はファシリテーターへの礼を受講生に促し、授業を終了する。

## 4.4 特徴

### 4.4.1 障害当事者の役割

「社会モデル授業」では障害当事者が授業 1 コマのゲストスピーカーとして登場し、授業時間の中でのワークのファシリテートを担当、自己紹介では自らの機能障害と共に日常生活の様子を紹介する。その後動画を用いて授業を進行し、自らの経験を障害の社会モデルとの関係で語る。また動画の中では、車いすユーザーと発達障害当事者が、主人公に障害の社会モデルの理解を促す指南役として登場する。すなわち「社会モデル授業」では、障害者は主体的役割を担うことのできる存在であり、また非障害者と変わら

ない日常を過ごす存在でもあることが提示される。

### 4.4.2 動画の利用

動画はユニバーサルデザインを採用し、字幕と手話をつけ、視覚障害者用の音声ガイド付きも作成した。

動画には言葉では伝えきれない情報を伝える効果があり、映像特有の現示性により現存の認知構造の変容が促され、学習意欲を高める効果が期待できる（下，1999）。

障害平等研修も動画を使用しているが、それとの違いは障害当事者が機能障害を説明する点である。先述のように機能障害の経験は蓄積と環境によって変化するが、動画では機能障害の特徴が環境との相互作用によって障害となることを、映像と障害当事者の解説を通して理解することにより、障害＝機能障害だと思ってきた受講生の「現存の認知構造」に「変容」を促す効果を期待した。

また、特に発達障害の要素を取り入れた。障害平等研修では、視覚的なわかりやすさの点から身体障害の例を使うことが多いが（久野，2018:35）、実際の障害学生に多いのは病弱や発達障害である（独立行政法人日本学生支援機構，2020）。むしろ、障害の社会モデルの観点から言えば、障害の課題は社会的排除や差別など障害一般に共通する。しかし、発達障害を例にしておくことはより身近に存在する障害に対する直接的な理解を促す。また、見た目にはわかりにくい障害である発達障害の機能障害とその経験を動画の中に組み込んだことにより、ファシリテーターの機能障害の特性に左右されずに発達障害について学ぶことができる。

### 4.4.3 発見型学習と時間

「社会モデル授業」は動画を教材に「困りごと」の発見とディスカッション、それらの解決方法を障害の医学モデルと障害の社会モデルで考案し、最後に今後の方向性を展望し、自分の行動を考えるとという形で進む。障害平等研修と同様に発見型学習を活用しているが、違いは、障害平等研修は様々なワークを積み重ねて経験するが、「社会モデル授業」は大学の授業（1 コマ）を想定しているため、この一連の流れを一度経験することである。また行動変容は最後のワークとして事後学習に組み込まれている。

## 5. 考察

### 5.1 授業の比較

これまでの論に従い、それぞれの授業の比較を表 1 にまとめた<sup>8</sup>。[障害知識先行型授業]と[疑似体験・介護等体験]は障害の医学モデルによる障害理解を基礎とし、これらの学びを通して受講者は「自己に無関係な傍観的理解」（中村，2011:3）を促進し、主に非障害者である専門家が説明することで非障害者と障害者の非対称性を強化してしまう可能性がある。

[障害者による講演]は「感動ポルノ」として説明したように、障害者を、課題を克服した「英雄」としてとらえ、[障害知識先行型講義]や[疑似体験・介護等体験]とは別の意味

	障害知識先行型授業	疑似体験・介護等体験	障害者による講演	障害平等研修	社会モデル授業
目的（内容・焦点）	機能障害の理解	機能障害による物理的バリアの理解、介護技術の経験	成功体験（困難の克服・努力）	社会を変える行動の形成	機能障害／社会的障壁・障害の理解／（行動の形成）
障害の理解	機能障害	機能障害	機能障害	差別、不平等、社会的排除、参加の制約	機能障害／差別・社会的排除・参加の制約
基礎となる障害モデル	障害の医学モデル	障害の医学モデル	障害の医学モデル	障害の社会モデル	障害の社会モデル
手法	名称等の暗記等知識の修得	できないことの類似体験	感動ポルノ	発見型学習（分析と議論、行動の形成）	発見型学習（分析と議論、行動の形成）
自分自身の認識	中立的（第三者）な存在	中立的（第三者）な存在	中立的（第三者）な存在	差別者かつ改革の行動者	学習者／行動者
講師	医療や福祉の専門家（主に非障害者）	医療や福祉の専門家（主に非障害者）	障害当事者	障害当事者	障害当事者
障害者の役割	機能障害／を有した者	被支援者	英雄・課題を克服した者	社会的障壁／を経験した	社会的障壁／を経験した
時間	授業時間内	授業時間内・実習時間内	講演時間内	3時間～2日間	90分～100分程度(2回)

久野（2018:33）に筆者加筆

表 1 障害を学ぶ授業の比較

で自分とはかけ離れた存在として障害者を捉える場合がある。

一方、[障害平等研修]と[社会モデル授業]はともに障害の社会モデルを基礎に、ワークの分析と議論を通して行動の形成に至るという発見型学習を取り入れ、障害当事者がファシリテーターを務めることによって、主体的存在としてのロールモデルを提示する。両者の違いは、機能障害の扱い方にみられ、[障害平等研修]ではその説明はせず、[社会モデル授業]では説明を加える。[社会モデル授業]では機能障害を理解し、そこに社会的障壁がかけ合わさって（社会的）障害（ディスアビリティ）が生じることを、ファシリテーターの経験談を通して具体的に知る、これがまさに石川が示した障害の社会モデルの理解そのものとなる。

加えて[障害平等研修]は、「社会を変える行動の形成」を重視しており、ワークの積み重ねが組み込まれているため、最低でも3時間は必要（久野，2018:38）だが、[社会モデル授業]は障害の社会モデルの啓発・理解促進が主要な目的であり、そのためのワークの実施に焦点化しており、行動の形成の考案に授業時間を割いていないため、短時間での実施が可能となった。

## 5.2 障害の社会モデル登場後の「障害を学ぶための授業」の在り方への提案

表1の比較はこれまでの議論をまとめたものだが、障害の社会モデルが登場する以前の障害の学び方との比較であり、改めて障害の社会モデルが登場して以降の障害の学びのあり方全体を再考する必要がある。

田口らは大学1年生に対して4月に調査を行い、彼らが大学教育を受ける前に実際に障害者に会ったり、あるいは障害者について学んだことがあると、障害に関する言葉をよく知っている傾向にあり、かかわり経験があることで受容的行動の段階（自分の社会集団に障害者が参加することを受け入れ、援助行為が自発的に表れる段階）への志向が形成されていたと述べている。しかし同時に接触経験が障

害者に対する態度を好意的にする場合もあれば非好意的にすることもあり、「かかわり方やその対象、どのような場面で関わるのがよいかを今後さらに検討していく必要がある」と述べている（田口ら，2012:315-316）。

試みに障害の社会モデルを障害の学びの最も基礎的なものとして学ぶことを提案したい。「障害平等研修」及び「社会モデル授業」は、障害当事者を、受講生を新たな知見に導く主体的な存在として位置づける。障害の社会モデルの理解は、障害を社会との関係で理解させる。これらをベースとしておくことで、「障害知識先行型授業」にみられた機能障害の知識はあくまでも障害者が身体上に宿している特徴と理解される。「疑似体験・介護等体験」の経験は環境との関係で理解され、環境の変容や工夫を考案する材料となる。「障害者による講演」は、障害者自身の才能や強運、努力の話と終始理解されるのではなく、環境との関係で整理され、彼らの偉業はどのような環境のもとに実現したのかという議論も導かれるのではないだろうか。あるいは講演者の経験した不自由や憤りは、環境の要因によって導かれたものという分析もできるだろう。

このように、障害の社会モデルを土台にそれぞれの学習を積み上げることで、障害を環境や社会との関係の中で考え、その解決に向けて社会に働きかけること、またその構成員である自らを省みる視点を養うことにつながるのではないだろうか。

## 6. おわりに

障害の社会モデルの考え方は、1970年代から英米で理論化され、2006年に成立した障害者権利条約のベースとなる考え方として、現在では世界標準となっている。本研究では、大学生に障害の社会モデルを伝える授業の構築を試みた。障害平等研修の発見型学習を取り入れ、障害当事者がファシリテーターを務めるスタイルを踏襲しつつ、機能障害についても、特に大学生に多い発達障害を中心に取り入れて説明し、1コマの時間に設定した。

また障害の社会モデルの学びは、それを基礎としておく



ことで、障害に関する知識や技術を、社会との関係で理解することに繋がると考えられ、そのために学びの初期の段階に学んでおくことが重要であるといえよう。

この授業の成果については、受講生の反応を見る必要がある。久野は障害平等研修の成果は、参加者の行動変容に現れるとして、6 か月後までに実際に行った行動がその効果を示すとしている<sup>9</sup>。今後の展開については別稿にまとめる。

**謝辞** 本研究は、大学間連携共同教育推進事業による研究である。研究チームのメンバーに謹んで感謝の意を表す。また公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会をはじめ、授業作成に際し、ご協力いただいたすべての関係者にも深謝申し上げる。

## 注

- 署名 164, 批准 182 United Nations [https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtidsg\\_no=IV-15&chapter=4](https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtidsg_no=IV-15&chapter=4) (20200920)
- 障害者権利条約の周知度として、条約の内容を知っている人は3.4%、内容は知らないが、条約ができたことを聞いたことがある人は17.9%、知らない人は77.9%となっている。内閣府『障害者に関する世論調査』(2017) <https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-shougai/index.html> (2020910)
- 障害の人権モデルについては、国連・前障害者権利委員会委員長のテレジア・デグナーの文章がある。 [https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/rights/rightafter/a\\_human\\_rights\\_model\\_of\\_disability\\_article\\_December\\_2014.pdf](https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/rights/rightafter/a_human_rights_model_of_disability_article_December_2014.pdf) (2020111)
- 例えば障害者権利条約前文 (e)「障害が発展する概念であることを認め、また、障害が、機能障害を有する者とこれらの者に対する態度及び環境による障壁との間の相互作用であって…」外務省 障害者権利条約 公定訳 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr\\_ha/page22\\_000899.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html) (20200912)
- 2018年12月22日に東京大学で行われた「障害者権利条約の実施-批准後の日本の課題」にて石川准氏が用いたスライドを氏の許可を得て引用している。
- Young, Stella “I’m not your inspiration, thank you” = 「私は皆さんの感動の対象ではありません、よろしく」 [https://www.ted.com/talks/stella\\_young\\_i\\_m\\_not\\_your\\_inspiration\\_than\\_k\\_you\\_very\\_much/transcript?language=ja](https://www.ted.com/talks/stella_young_i_m_not_your_inspiration_than_k_you_very_much/transcript?language=ja) (20200913)
- Discovery Learning または Facilitated Participatory Learning(FPL)という名称で説明することもある (久野 2018:25,47)
- 久野が作成した表 (久野 2018:33) に、障害を学ぶための方法として「障害知識先行型授業」、「疑似体験・介護等体験」、「障害者による講演」、「社会モデル授業」とし、また比較項目として「障害者の役割」、「時間」を加え、「疑似手法がとられる課題」を削除した。障害平等研修の内容は、比較を明確化する観点から「手法」については「発見型学習」とし、「講師」の「障害者本人」を「障害当事者」と表記した。そのほかは全て変更せず、久野の表を参考に筆者が加筆した。
- 久野研二『社会の障害をみつけよう』現代書館(2018):39-40

## 文献

- Barghs, M., Atkin, K., Hatton, C., and Thomas, C. “Do disabled people need a stronger social model: a social model of human rights? Disability & Society, 2019, Vol.34 No.7-8, 1034-1039 Routledge Taylor & Francis Group <https://www.tandfonline.com/doi/epub/10.1080/09687599.2019.1619239?needAccess=true> (20201111)
- Brindle, D.: Disability - Mike Oliver obituary- Academic and disability rights campaigner *The Guardian* (2019, Mar. 19) <https://www.theguardian.com/society/2019/mar/19/mike-oliver-obituary>

- (20201111)
- 独立行政法人日本学生支援機構『障害のある学生の修学支援に関する実態調査』令和2(2020)年9月1日 [https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/chosa\\_kenkyu/chosa/index.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html) (20200913)
- 外務省 障害者権利条約 公定訳 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr\\_ha/page22\\_000899.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html) (20200912)
- 石川准『東大な人: 石川准さん』『東大ナビ』2018. 03. 27 <https://www.todainavi.jp/feature/13835/> (20200915)
- 久野研二『社会の障害をみつけよう』現代書館(2018)
- Maris, N. 2004 “Foreword” Zola, I. K., *Missing Pieces –A Chronicle of Living With a Disability* -1982 ニキリンコ訳『ミッシング・ピースーアメリカ障害学の原点』生活書院(2020)
- 内閣府『障害者に関する世論調査』(2017) <https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-shougai/index.html> (2020910)
- Oliver, M., *Social Work With Disabled People* Springer Link (1983) = 野中猛監訳 河合尚子訳『障害学にもとづくソーシャルワーク』金剛出版(2010)
- Oliver, M.: Disability - Vic Finkelstein obituary-His political activism turned from apartheid to disability rights *The Guradian* (2011, Dec. 22) <https://www.theguardian.com/society/2011/dec/22/vic-finkelstein> (2020111)
- Pring, J. “Professor Mike Oliver :Outpouring of admiration of social model pioneer” *DISABILITY NEWS SERVICE* (2019, Mar, 7<sup>th</sup>) <https://www.disabilitynewsservice.com/professor-mike-oliver-outpouring-of-admiration-for-social-model-pioneer/> (2020111)
- 下孝一「認知の質に及ぼす映像の効果:強力な認知的不協和を喚起する力について」『教育メディア研究』6巻1号(1999):43-46
- 杉野昭博『障害学—理論形成と射程』東京大学出版会(2007)
- 田口禎子・林安紀子・橋本創一・池田一成・大伴潔・菅野敦・小林巖・三浦巧也・戸村翔子・村松綾子「通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討—教員志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ』63:303-319(2012)
- 田中恵美子・奥平真砂子・下尾直子・野澤純子・平井佑典『平成29年度大学間連携等による共同研究「障害の社会モデル」について考える実践ガイド』(2020)
- United Nations [https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtidsg\\_no=IV-15&chapter=4](https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtidsg_no=IV-15&chapter=4) (20200920)
- WHO Recommendation on Community Mobilization through Facilitated Participatory Learning and Action Cycles with Women’s Groups for Maternal and Newborn Health. <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK237009/> (20200915)
- Young, S., “We’re not here for your inspiration – The Drum (Australian Broadcasting Corporation) (2012, July, 4<sup>th</sup>) <https://web.archive.org/web/20160707104422/http://www.abc.net.au/news/2012-07-03/young-inspiration-porn/4107006> (20201114)
- Zola, I. K., *Missing Pieces –A Chronicle of Living With a Disability* -1982 ニキリンコ訳『ミッシング・ピースーアメリカ障害学の原点』生活書院(2020)